
空狩

白馬 黎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空狩

【Nコード】

N9682Q

【作者名】

白馬 黎

【あらすじ】

一年に一度行われる狩猟祭。その目玉競技、「空狩」に、最も価値の高い雪豹を必ずしとめて帰ると宣言した若者がいた。巨鳥にまたがり投げ槍をたずさえ、シロジユが想うは流浪の歌姫。「空」をテーマにしたアジアンファンタジー。

原稿用紙22枚、完結済み。

（重複投稿：本家サイト「Empty Air」）

ドルウルウウ、と風がうなるような無数の太鼓と祈りの声が響いている。と、その中に、カウウン！ と高い鐘の音が混じった。羽音が、暴風が、観客の頬を撫ぜる。二十四氏族、二十四羽のロク（巨鳥）が騎手を乗せ空へ舞い上がった。――狩猟祭の目玉競技、空狩が始まったのだ。

「待っててくれ、ツエリン」

力強く羽ばたく愛鳥の背で、【明けの明星】族のシロジュは首にかけた編み紐をにぎりしめた。ツエリンが祈りをこめて編んでくれたお守りだ。雪の魔物はあざやかな色と、魔力を跳ね返す力を持つ雪豹を嫌うという言い伝えがある。

ほかのロクは平原や針葉樹林を目指して飛んでゆく。シロジュは愛鳥、ビャンバを、雪山へ向かう風に乗せた。ビャンバは純白のロクだ。最初から危険な雪山へ行くのだと決めて、シロジュは数羽のロクから雪の保護色を持ったビャンバを選んだのだった。

「雪豹を必ず狩ってくる」

シロジュは長い鞭を振るう。ビャンバが驚いたように急降下し、すぐにスピードをあげた。

そんなシロジュを、じっと見つめている二人の人物がいる。

「おじさま、シロジュは雪豹を狩りますわ」

歌合戦に出るべく伝統衣装を身につけたツエリンと、シロジュの父、【明けの明星】族の酋長バサンだ。

「お前のような流れ者の女には、息子も酋長夫人の座もやれぬ」

「シロジュが雪豹を狩ってくれば、シロジュと私の結婚を許すと言ったのは、おじさまのほうです」

ツエリンが一步を踏み出すのにあわせ、ジャウン、とその衣装につけられた無数の鈴が鳴る。ツエリンは【渡り鳥】族、旅をしながらいろいろな部族で物語を語る一族の歌姫だ。

「酔った席でのこととはいえ、わしも男だ。約束は守ろう。が、シロジユに雪豹は狩れぬ。あれは孤高の獣、おそろしく頭の切れる雪山の狩人なのだ」

「シロジユなら必ずやってくれますわ。あの入ほど空狩の技術を身に着けた若者はいないとみんな噂しています。それともおじさま、二十年前の空狩で雪豹を捕えられず、何の獣も持たずに日が暮れてから帰ってきたことがあると聞きました。二十四部族みんなの笑い者になったと。シロジユもそうだと考えておられるのではないでしょうね？」

あまりの言いようにバサンがツエリンをにらみつける。ツエリンは鈴の音も荒々しくきびすを返し踊りの競技の列にまぎれていった。「なんとという女だ」

バサンはブーツのかかとを地面へたたきつけた。

「まさか、二十年前のわしとまったく同じことが起こるとは、思いもしなかったぞ。相手の女の性格から言っていることから丸写しではないか……」

息子の消えた空をバサンはずうつと目で追う。二十四羽のロクすべてが既に空の向こうへ消えていた。

「生きて帰ってきて、シロジユ。私、今日はあなたのために歌います。雪豹はもちろん狩ってほしいけれど、無理ならかまわない。お父様に啖呵をきってしまったけれど、あなたの命のほう、ずっと大切なもの……」

バサンからは見えない列の中でツエリンは眩き、シロジユの騎乗するビャンバの真っ白な羽を髪に編みこんだ。

*

「バサン」

名を呼ばれて振り返れば背の高い女が立っていた。白を基調とした男物の衣装をまとい、弓の競技にでも出るのかごつい胸当てをつ

けている。

「もしかして、リンチエか？　よく後姿で俺がわかったな！　何年ぶりだ？」

「あなたの父上に、あなたの村を追いついて以来」

リンチエがはずかしそうに笑った。二十年ぶりにもかかわらず、その笑みはおそろしいほどバサンの記憶と変わりが無い。

もし二十年前の空狩で雪豹を捕らえていたらバサンが結婚していた女性。それが【渡り鳥】族のリンチエだった。

「バサン、【明けの明星】族の酋長なのね」

「ああ。お前と別れて三年後に結婚した。息子もいる」

「私も。娘がいるのよ」

思いのほか自分の言動がぎくしゃくしているのに気づき、バサンは苦笑をもらした。リンチエの手をとり自分の両手でがっしりと包みこむ。握手をするのも忘れていたのだ。

「元気そうで、よかった。祭りが終わったら私の天幕へ来ておくれ。一族全員にお茶を振舞おう。この二十年間の物語を村の者たちに聞かせてほしい」

リンチエが満面の笑みを返してきた。

「よろこんでお受けするわ。でも、その前に祭りよ！　私の娘が今、歌合戦に出てるの。なかなかいい声だから一緒に聞きにいかない？　ちやうど行くところであなを見つけたの。それとも、なにか出る競技がある？」

「いや。今回は息子が空狩に出るからな。じっくり見守ろうと思っている」

「空狩。なつかしいわ」

バサンも目を伏せ、「本当に懐かしいな」と感慨深く答えた。
「歌が聞こえてきたわ。私の娘よ」

——ロクよ、飛べ飛べ、風に乗って

雪に負けず、魔物に負けず、

孤高の狩人、がっしとつかみ

いとしい人を、背に乗せて――

空狩の歌が細く小さく聞こえてくる。

――明けの明星、渡り鳥

雪色のロク、闇夜のロク

風神選ぶは

さてどちら？――

冷やからしい返歌が返る。バサンは眉にシワを寄せた。一方がリンチエの娘、【渡り鳥】族の歌い手なら「渡り鳥」の一節はわかる。が、そこになぜ「明けの明星」が出てくるのだ？ シロジユの騎乗する純白のロクと【渡り鳥】族の若者が騎乗する漆黒のロク、どちらを応援するか。これは、まさか……。

――風神さまは、白がお好きよ

勝つのは白に決まっているわ

黒も応援するけれど、

青なんかは論外ね――

さらりと返され【青嵐】族の歌い手は怒りに顔を赤らめた。もう一方は誇らしげに頭をあげ、髪に編みこんだ白い羽を風に揺らしている。

「ツエリンじゃないか！ お前の娘だったのか」

「私の娘をごぞんじ？」

「知ってるも何も」

「知ってるも何も、なに？」

思いがけぬ鋭いまなざしを受け、バサンは立ちつくした。

空狩で狩つてよい獣は一頭だけ。たとえ小さなナキウサギであっても、一匹でも狩ればそのまま開催場へ帰らなければならないのが空狩の掟だ。

狙いやすく高得点を得られるチルーの群れから目を離し、シロジ

ユは首をかしげた。そこにいるはずのないものが見えたからだ。

夏の終わりだが、標高の高いこのあたりでは万年雪がちらほらと残っている。深い谷にぼつんと残った雪のあたりから、もうもうと黒い煙、助けを求める狼煙があがっていた。煙は弱った獣のようにたよりなく、量が多くなったり少なくなったりと安定していない。

雪山ではむやみに降りては危ない。慎重に、慎重に降りる場所を選んでも、万年雪のはざまに足をとられ、あるいはゆるんだ雪を刺激して雪崩を巻き起こし、逃げられず雪の下に消えたロク騎手をシロジユは何人も知っていた。狼煙を中心としてビャンバを旋回させる。シロジユは常に用意しているロープに足をかけられる輪と滑り止めの結び目を作り、いつでも投げられるように用意した。

ひよるるるううう……、とロクの口まねをする。助けに来たぞ、ロープを投げるといふ合図だ。同じ合図が返ってきたらロープを投げていい。合図が返ってこない場合は、相手にその力がなく、ロープをつかむことができないので、何か対策を考えなければならぬ。合図は返ってこない。シロジユはロープをまとめなおし、ビャンバに急降下の指示をした。ビャンバが全身の筋肉を緊張させ、一直線に地上へ降りてゆく。獲物を襲うのと同じ勢いだ。地面につく寸前に失速し、着地せずに、もう一度空へ翔けあがった。

老婆だ。灰色のロープを着た老婆がひとり、立ちつくしてシロジユを見ていた。怪我をしているような様子はないが、表情がおかしい。巨鳥が真横を猛スピードで通りすぎても顔色ひとつ変えなかったのだ。

まさか、魔物に魂を抜かれたのか。シロジユはもう一度、ビャンバに急降下の指示を出した。状況があまりにもわからない。

「大丈夫か、ばあさん！」

もっと丁寧な言葉を使いたいのだが、老婆の隣を猛スピードで飛ぶので、できるだけ短い言葉を選ぶ。老婆がうつろな目でシロジユを見た。長い白髪、深く刻まれた顔のシワ。

「聞こえるか！」

もう一度滑空。

「返事してくれないと、ロクの爪に引っかけて無理に運んじまうぞ！」

同じように滑空して、シロジュはぎょっとした。いつの間にか老婆の髪が白髪から黒髪に変わっていたのだ。ビャンバの背中でシロジュは固唾を呑む。見間違いだろうか、いや……。

老婆、いや、シロジュの父バサンと同じくらいの年齢の女性。髪は黒々と長く、うつろだった目はいつくしむように笑みを浮かべて面白がるようにビャンバとシロジュを見つめていた。あれだけ顔に浮かんでいたシワが、ひとつもない。シロジュの脳裏で警鐘が鳴り出した。

「ビャンバ、やめろ。旋回してくれ」

手綱を引いて指示をしたが、ビャンバがなぜか言うことを聞いてくれない。憑かれたように急降下と滑空を繰り返す。

「ビャンバ！」

老婆、いや、滑空するたびに若返る女は、もうツエリンと同じほどに若い。

挑むような目つきをした女は滑空を繰り返すごとにロープを脱ぎ、上着を脱ぎ、雪の中で少しずつ薄着になってゆく。白い肌が見え隠れし、女はゆつくりと、怪しい美しさをシロジュに見せつけはじめた。

「答えてあげましょうか。二十年前と同じことを次はあなたが仕組んだんでしょう？ 母親の私が知らないと思ったたら大間違いよ」

「それは……」

口ごもるバサン。リンチエは長い髪を荒々しくかきあげる。

「まさかと思っただわ。まさか、あなたが同じことをするなんて。あなたにもう一度会ったら言いたいと思っていたことがたくさんあつ

た。旅で経験した楽しいことをたくさんあなたに話したかったわ。
一番はじめにこんなことを言わなきゃならないなんて、私、とても
残念」

「リンチェ」

「あなたにはわかつていると思っていたわ。雪豹をとってこれれば結婚を許すということが、どれだけ曖昧なことか。息子を危険にさらし、娘をはらはらせながら待たせることが、お互いどれだけ
つらいことか」

「待ってくれ、リンチェ」

バサンがさえぎり、リンチェの手を力強く握ってくる。リンチェはびくつと体を震わせた。バサンが悪かったと手の力をゆるめ、しかしリンチェの手自体は離さず言葉を続ける。

「かわいそうなことだとは、わかっている。だが、俺も二十年前の親父への復讐のために同じことをやったわけではない。それは、わかってくれ」

バサンが、シロジユの行った雪山のある方角をのぞむ。

「俺が、あの山で出会った一頭の獣がいる。あの鷲色の瞳、忘れはしない……。氏族の魂を背負う雪豹に、俺は決闘を挑んだのだ」

リンチェは目を見開いた。バサンは雪山を日暮れまで飛び回ったが、雪豹に出会うことはついにできなかったと聞かされていたのだ。
「俺は敗れた。帰路、俺はチルーにも雪ヤギにも出会ったが、ナキウサギー匹狩らなかつた。あまりの緊張と興奮に疲れきり、帰るだけで精一杯だったのだ。あの雪豹の姿を思い浮かべるだけで、今でも背筋に震えが走る」

「けれど、あなたは氏族の恥をさらし、私たちは引き裂かれたの」
リンチェは吐き捨て、バサンをにらみつけた。バサンは山をのぞんでいる。リンチェと目を合わせたくないのか、息子を案じているのか。それとも。

「祭りが終わりお前が去ってから、俺は父の意図を知った。父もまた祖父に同じことを試されたのだ。そして、これはずっと、【明け

の明星】族が始まってからずっと続く、伝承なのだ。俺は決して、息子に想い人をかけた狩りをさせまいと思っていたが、酔った勢いでつい、言ってしまった」

リンチエはバサンを、バサンは雪山を、まだ、見つめている。

長い沈黙と硬直の末、先に動いたのはバサンだった。ゆっくりとリンチエを振り返り、静かな笑みを浮かべる。

「この狩りに、シロジュの一生がかかっている。祈ってくれ、リンチエ。二十年前の俺とお前のように、シロジュとツエリンが引き裂かれないように。俺は祈っている、心から」

——私は祈る、あなたの安全を

あなたが帰ってくることを、ただただ祈る——

ツエリンの一途な歌声にリンチエはいらいらかぶりを振った。

「目を覚ませ、ビャンバ！」

鋭い痛みが背に走り、ビャンバはぶるると体を震わせた。

「守ってくれ、ツエリン！」

騎手が鞭、あざやかな編み紐を結びつけた鞭でビャンバを追っているのだ。煙に朦朧となっていたビャンバは自分が地面すれすれを飛んでいるのに気づき、大慌てで高度を上げる体勢に入った。ロクも馬鹿ではない。氷原着陸の恐ろしさを知っている。

（白き翼のロクよ……）

おぞましい声が下から聞こえ、ビャンバは羽を逆立てた。

（私は、白が好きじゃ。私のものになれ、私の雪になれ）

女がふたたび老婆に戻っている。背中に乗せた騎手がもっと高度をあげるように指示をした。ビャンバもそれに従おうとする。

だが従いきれない。気流が激しく乱れてきたのだ。上昇気流をうまく見つけられない。

そびえたつ山々を這うようにして暗い雪雲が迫ってくる。どろろ

ろう、と頭上で雷鳴がとどろいた。嵐が、季節外れの雪嵐がやってくる。心臓をわしづかみにされた気になり、ビャンバは空中でひたすら羽ばたいた。

（どうじゃ、雪のロクよ。私のところへ来るならば嵐を鎮めてやろう。私は雪の魔物。それくらいは、たやすいことじゃ）

「ツエリン……」

騎手が恋人の名をつぶやき、闇雲に編み紐のついた鞭をふるった。（やむを得ぬ。これでどうじゃ、強情なロクよ。私はお前の翼がほしいだけじゃ）

稲妻が滝のように降り注いだ。衝撃を受けた山々が耐え切れず、巨岩の群れとなってビャンバとシロジユに襲いかかる。山はひとつだけではない、四方八方から、ロクの体よりも巨大な岩が。

——ぐわああああおおお……。

突然の獣の声と共に、幻がはたと消え失せる。嘘のように消えてゆく雪崩の中に、ビャンバは鳶色の光を見た。【明けの明星】族の象徴、最後まで光にあらがう星を思わせる光。

隻眼の雪豹が雪と岩の混じりあった中にたたずんでいた。爛々と光る鳶色の瞳がなければそれと気づかないほど風景に溶けこみ、しかし確かな王者としての存在感をかもし出す。どうやら獲物を捕らえた直後のようだ。足元に白い小さな毛皮を横たえ、鋭いただひとつの目でビャンバとシロジユを見つめている。

——ぐわああああおおお……。

魔力を跳ね返す力を持った吼え声。魔物が舌打ちする音がした。

（雪豹め……。まあよい、雪のロクは、毎年一羽は来るからの。また来年を待つだけさ）

魔物が雪の中に解けてゆく。熱湯の中に落とされた雪のように、ふうっと。

「狩るぞ、ビャンバ」

騎手の高ぶりが背を通してビャンバ、巨大な猛禽の翼に伝わってきた。ビャンバは全身の筋肉を緊張させ、狙い定めて急降下する。

隻眼の雪豹が太く長い尻尾を揺らし、おそろしいなり声を漏らした。

閃光一線！ 鉤爪を伸ばし威嚇の鳴き声をあげる巨鳥、そして孤高の狩人の爪が激突した。雪豹からすさまじい怒りの声があがる。騎手の投げ槍が雪豹のわき腹をかすったのだ。

騎手から急旋回、失速の合図がかかる。ビャンバは空へ翔けあがり急旋回、雪豹をもう一度掌中へ捕らえようと鉤爪を伸ばした。

雪豹がいない。がるううう、と怒りの声を真上に聞いてビャンバは空を仰いだ。一瞬のうちに雪山へ駆け上がり、跳んだ雪豹の影が目に入る。ななめ上から落ちてきた雪豹が、がっぷりとビャンバの首筋にかぶりついた。ビャンバが悲鳴をあげる。

騎手が槍を振り回し、雪豹を追い払おうとしたが、雪豹はがっつりと爪をビャンバの羽毛にひっかけ頸動脈を噛み切ろうと牙をたてる。荒れ狂うビャンバ、こらえきれずにしがみついてくる騎手と雪豹……。

ぶらんと大きく揺れた雪豹の背に大量の槍が降りかかった。騎手が槍袋を渾身の勢いで雪豹に投げつけたのだ。雪豹が離れる。ビャンバは怒りの声を高々とあげながら、地面にのびている雪豹をとらえようと鉤爪を伸ばした。

と、つかむ寸前に雪豹の体が跳ねあがった。とらえ損ねる。かわりに足に触れた小さな毛皮を、しっかりとビャンバが足で押さえた。そのまま空中に持ち上げると、背後で雪豹が低いうめきを漏らす。

「何をつかんだ、ビャンバ！」

騎手の叱責が聞こえ、雪豹に傷つけられた肩を力任せに殴られるのを感じた。

「雪豹はそこだ。何をつかんだんだ！」

騎手の怒号が嗚咽に変わった。空狩で狩ってよい獣は、ただ一頭だけと、掟に定められているのだ。

雪豹ではなく、シロジュは雪豹の獲物を取ってきた。泣きに泣きながらシロジュは二十四氏族の前に獲物を落とす。

「なんと、これは……」

涙を浮かべてほほえむ美しいツエリン。祝いの鎗矢が打ちあげられ、ひゅーひゅーと音を立てた。おうおう……！ 雪豹の吠え声をまねた祝いの吠え声があがる。それがあいまって山々に反響し、ひとつの巨大な歌声となって、大地を揺るがした。

「子ども、しかも無傷の雪豹だ！ シロジュが雪豹をとってきたぞ！」

驚きのあまりふらつきながらシロジュがビャンバの背をおり、おそるおそる自分の獲物を確かめた。周りからどっと笑い声とはやし声があがる。その人並みをかきわけ、ツエリンが白い羽をゆらしてシロジュにしがみついた。

「シロジュ、我が息子よ……」

バサンが空をあおぎ、うめきに似た声をあげた。

「氏族の掟にのっとり、雪豹を見た者に、【明けの明星】族、酋長の座を譲り渡す。そして、みごと雪豹を狩った者には、ひとつの願いを、何であるうと叶えるという特権が生ずる」

つつ、とつたつた雫が、雪と光に反射してきらめいた。

「他土族との婚姻は、決して許されないこと。が、この特権は絶対だ。願うがいい、シロジュ。俺の二十年ごしの恋を、俺のかわりに叶えてくれ」

そつと隠しておいたふたりの結婚衣裳を取りに向かうバサンの後ろ、シロジュとツエリンが唇を重ねた。

.....Fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9682q/>

空狩

2011年11月16日15時05分発行